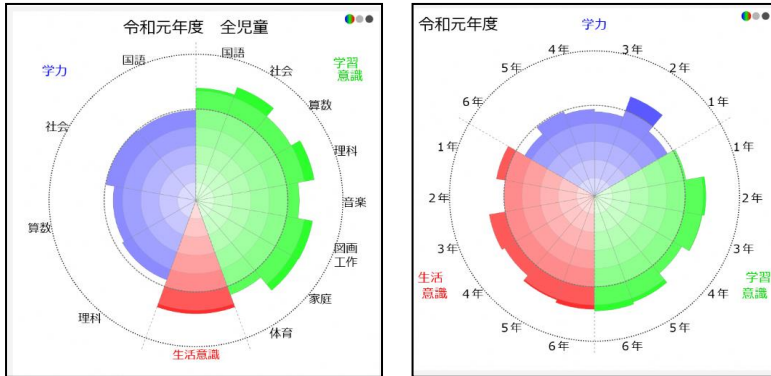


1 学力に関する実態把握

(1) 学力の概要と要因の分析

本校の子どもの学力は市平均並みか、もしくはやや下回る傾向にある。特に算数、理科においては平均値を下回る値となった。一方で、学習意識はどの学年、教科においても平均値を大きく上回っている。(図1-1,1-2参照)



算数科の学習については、「好き」「どちらかといえば好き」と答えた子どもは全体の8割にのぼる。「よくわかる」「どちらかといえばわかる」と答えた子どもは9割近くにのぼる。「よくわかる」と答えた子どもは市平均を上回る。この傾向は国語科、社会科においても同様である。

このことから、多くの子どもが授業の中で学ぶ楽しさを感じており、その時間内に学習課題を解決したり理解を進めたりすることが

できているといえる。これは、どの学級においても子どもに寄り添った授業が展開されているということの表れであるといえる。その上で、国語、社会、算数、理科の4教科の学習においては、子どもに寄り添いつつも確かな学力を育むために次のような改善の方向を示したい。

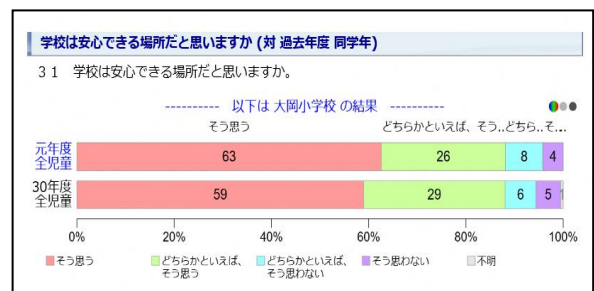
(2) 教科学習の改善の方向

- 【国語科】「書くこと」において、漢字の読み書きや語句のまとめ、主述の関係、主旨を効果的に伝えるための論理的な文章構成や表現の工夫などについて、授業中での多様な言語活動を通して育成していく。
- 【算数科】計算や作図の技能の習得だけでなく、数のまとめや量感、単位量あたりの大きさなどの数の見方を広げるような学習、ブロックや立体などを使った算数的操作活動をふんだんに取り入れ理解を促進する。
- 【社会科】資料から読み取れる事実を比較したり、関連付けたりしながら、実社会における事象と結びつけて考えられるようにする。その際、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して考えることができるように、地図や年表など適切な資料を使って授業を行う。
- 【理科】身近な事象に豊かに触れ、子どもの素朴な疑問や気付きを大切に学習展開を図る。検証可能な学習課題を設定し、適切な実験方法を用いて実感的に理解を深めていけるような授業を行う。

(3) その他の要因分析

子どもの学習・生活意識が高い要因として、全職員が子どもの願いの実現を中心においた学習展開を図っていること、どの子も学びやすい学習環境づくりに努めていること、学級に馴染めない子どもへの複数の教職員による支援体制の整備などが効果的に働いたと考えられる。「学校は安心できる場所だと思いますか」という質問に対して、「そう思う」と答えた子どもは前年度より高い数値を示していることから、その成果が徐々に現れていることが読み取れる。(図3-1参照)

今後も、どの子にとっても安心できる学習環境、教職員の協力体制を整えておくこと、そして学びがいのある学習活動を創ることで、学力の向上にも大きく寄与していくと考える。本来、学習への関心が高く、友達との望ましい関わり合いも構築する力のある子どもたちである。様々な場面でそのよさが生かされ、お互いを認め合ったり高め合ったりしながら学ぶ環境づくりを今後も強く進めていくことが大切である。



▲図3-1

2 各学年の具体的取組

1 学年

- 書く活動を充実させるために、国語・算数・生活科等で自分なりの考えをもって話したり、友達の話の聞いたりする活動を大切にす。
- 算数の学習で学んだことを楽しく生活の中で生かすことができるようにするために、具体物操作を行って数量に関わりをもてるようにする。
- 全員が安心して授業に臨めるよう、視覚的支援を積極的に取り入れる。

2 学年

- 学習活動の中で、自分の考えを伝えたり、友だちの考えを聞いたりする場面を取り入れて、話し方、聞き方を身につけられるようにする。
- 国語では、漢字の読み書きの定着や語彙を増やすために、繰り返し練習したり、授業の中で様子や気持ちを表す言葉に触れたりする。
- 算数では、具体物の操作をしながら数への関心を高め、学習したことを日常生活の中で活用できるようにする。

3 学年

- どの学習でも、自分で課題設定したり、生活と関連付けながら考えたりできるように、導入の仕方や授業展開を工夫する。
- 自分の思いや考えを豊かに表現したり、相手に分かりやすく説明したりできるように、ペアトークの活動を取り入れたり、辞書を活用して語彙を増やしたりする。
- 観察・記録の技能を高めていくために、視点が明確になるような声かけやワークシートの活用に取り組む。

4 学年

- 国語科では、大事なことを落とさないようにしながら聞く能力をのばすため、話の目的を意識する場面を多く作る。また、聞く姿勢も意識し、相手の方に体に向けて聞く指導をする。話をする際には、しっかりと理由立てて話せるので、指導を続ける。
- 算数では、わり算の筆算に向けて、全員のかけ算九九の定着を図る。また、グラフの読み取りや数の相対的な大きさについても、今後の割合の学習につなげられるよう、丁寧に指導をしていく。

5 学年

- 国語では、目的や意図に応じた書く活動を重視する。話したり、聞いたりする活動では、話し手の意図を捉えて自分の考えをもてるようにする。また、辞書を積極的に活用し、児童が言葉に触れる機会を増やしていく。
- 算数では、自由進度学習を一部取り入れ基礎的な技能の定着を図ると共に、考えを図表や文、式で適切に表現する活動を位置付ける。
- どの学習においても課題解決の見通しを具体的にもてるようにしたり、単元の終末に学習内容を振り返り、知識を整理する時間を設けたりする。

6 学年

- 国語科の学習では、「話す・聞く」において、クラス全体で会話運用のルールについて考え、自分の考えを深める聞き方を身に付ける。また、話し合い活動をグループから全体へとスモールステップで学習を進める。それによって、自信をもって自分の考えを主張する力を伸ばしていくことができるようにする。
- 理科や社会の学習では、単元全体の見通しをもてるように、授業の始まりに前時の学びを振り返る。また、授業の終末時に自分の理解の状況や学びのプロセスを振り返り、学びの連続性を意識することを習慣化させていく。

個別支援学級

- 個別の教育支援計画、個別の指導計画に基づき、話し言葉、表情、仕草、書き言葉等、発達段階に応じた適切なコミュニケーション手段を学ぶ場を、学校生活のあらゆる場面で意識的に設ける。
- 友達同士のやり取りを重視し、質問や感想、アドバイスなどの交流場面を位置づける。
- 日記や学習の振り返り、観察カードなどの書く時間や、それを発表する時間をカリキュラムに位置づけ、表現（書く・話す・聞く）の充実を図る。